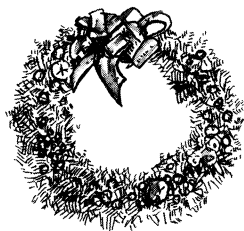


アルコールと自殺

アルコール依存症と自殺との関係からの考察

大原 健 士 郎



はじめに

アルコール依存者と自殺との関係については、これまでにも数多くの報告がある。例えば、Schmidt, W. によると、アルコール依存者の自殺頻度は一般人口の約六倍だといわれる。また、Adelstein, A. によると、男性では一般人口死亡者の二二倍、女性では二三倍という。一方、自殺者中のアルコール依存者の割合をみると、Kessel, N. の報告では、男性の三九%、女性の八%がアルコール依存者であり、Batschelor, C. によると、男性自殺者の三分の一、女性自殺者の一二%がアルコール依存者であった。

これに対して、わが国では、かつて筆者（五・二%）や清野（四%）の報告があり、欧米諸国に比して、わが国のアルコール依存者の自殺頻度は、それほど高くはないかのような印象を与えてきた。しかし、最近の傾向として飲酒様式の欧米化、ストレス解消の手段としてアルコールの連用などのために、アルコール依存者の自己破壊行動、と

りわけ自殺の問題が注目されるようになってきた。比較的最近の斉藤らの報告では、アルコール依存者の一・二％に自殺未遂の既往を認め、入院中や退院直後の自殺者も目立つことが指摘されている。

アルコール依存者の自己破壊傾向

Menninger, K.は、慢性自殺の一つにアルコール依存症を考えている。すなわち、医師から「これ以上飲酒を続けると、肝臓も心臓も悪いのだから、死の危険性がある」と予告されており、本人もそれを十分に承知しておりながら、なおかつ飲酒を続けて死亡するとすれば、その人の心理は自殺者の心理と何ら変わるものではなく、まさに慢性自殺と呼ぶべきものだというのである。

Menninger は、どの自殺者にも三つの願望が存在すると述べている。まず「殺したい願望」で、これは原始的な破壊衝動であり、いわば敵意とか憎しみといった感情からなっている。この願望の

対象は、多くの場合、本人と密接な関係をもつ人、つまり親とか配偶者、友人あるいは抗争不能な社会的力をもった人であるために、この願望が表出され、行動化されることなく抑圧される。そして愛と憎しみ、依存と敵意といった内部葛藤により、ますますこの願望が強まる。第二の「殺されたい願望」とは、殺したい願望が内向し、自分を非難するようになったもので、罪悪感を生じる。こうした自己叱責や罪悪感とともに自信喪失、孤立感が強まり、こうした心理的な緊張を解消したいと願う。第三の「死にたい願望」は、前二者が急性の衝動であるのに対し、比較的慢性の経過をとり、絶望感・疲労感・落胆が著明に現れてくる。このように、葛藤・抑うつ・苦悩などの比較的長い経過のうちに結晶してくる願望である。

筆者らは、この三つの願望にそって、アルコール依存者の自己破壊傾向を神経症との比較において分析したことがある。それによると、「殺したい願望」はアルコール群に顕著であり、しかもこの

①自殺未遂と希死体験の頻度

項目 年齢	アルコール依存症	希死念慮	自殺未遂
～29歳	4名 (5%)	1	1
～39歳	22名 (26%)	7	5
～49歳	23名 (27%)	6	3
～59歳	23名 (27%)	8	4
60～ 歳	13名 (15%)	2	0
計	85 (100%)	24(28%)	13(15%)

項目 年齢	神経症	希死念慮	自殺未遂
～29歳	10名 (50%)	9	2
～39歳	8名 (40%)	7	1
～49歳	2名 (10%)	2	0
計	20 (100%)	17(85%)	3 (15%)

$$\chi^2 = 11.29 \quad P < 0.001$$

傾向は年齢の若い者ほど強い。「殺されたい願望」「死にたい願望」はむしろ神経症群に強い。このことから、アルコール依存者の自殺は、神経症者のそれよりも衝動的で、外罰傾向をもっていると考えられる。

自殺未遂と希死体験

アルコール依存症八五名、神経症二〇名について、希死念慮と自殺未遂の既往を持つ者を検討すると、表①のようになった。この表をみてもわかるように、神経症群には希死念慮を抱く者が多いにもかかわらず、自殺未遂の既往となると、両群とも同じ一五%を示していることである。この結果から、アルコール群は、いったん希死念慮を抱くと、衝動的に行動し易いことが想像される。

自殺手段と対人関係

自殺手段は、自殺者の心理状態を間接的に表現している。表②には、アルコール依存症者と神経症者との自殺手段を比較しておいた。アルコール依存者では、刃物、縊首、入水など、過酷な致死的手段が目立ち、致死率も高いことが想像される。また、自殺の直接動機をみると、アルコール依存症では、いわゆるアルコール精神病の幻覚・妄想によるものも散見されるが、対人関係の破綻が

②自殺企図の直接動機と手段

年齢(歳)	動 機	手 段
(アルコール依存症)		
28	家庭がうまくいかない	切 腹
30	飲酒のため両親にすまない	ガ ス
33	幻 聴	入 水
36	女性関係	農 薬
37	仕事の失敗・母親の不在	①手首を切る ②縊首
38	妻との死別	不 明
40	飲酒のため父親にすまない	手首を切る
46	幻 聴	縊 首
47	道楽のため帰宅できない	睡眠剤
50	希望喪失	不 明
55	何となく	縊 首
59	子どもと死別	入 水
59	幻 聴	①農薬 ②入水
(神経症)		
20	劣等感	睡眠剤
24	対人関係	睡眠剤
36	劣等感	睡眠剤

圧倒的に多く、神経症群と比較すると、妻子や同胞など、家族内人間関係の歪みが顕著である。

アルコール依存症と他の病理現象

アルコール依存症者の自殺例を検討すると、過去に致死的な事故の既往のある人が圧倒的に多い。

もしもそのまま死亡すれば、事故死として扱われたいと思われるものでも、心理学的剖検(自殺か事故か判断としないケースを過去にさかのぼって、主として人間関係を中心として分析し、自殺ではなかったかどうかを突っ込んで分析する方法)をしてみると、意外に自殺と考えてよいものが多い

のである。

また、離婚も他の精神障害（例えば、精神分裂病やうつ病など）に比べて多いし、犯罪とも密接な関係がある。アルコール依存者の子供を調べてみると、他の精神障害者のそれに比して、問題児が多いが、とくに非行が目立つことが報告されている（黒宮）。

あとがき

アルコールと自殺というテーマを与えられ、主としてアルコール依存症と自殺との関係を述べてきた。しかし、それとは別に、酩酊と自殺との関係にも言及しておかねばならない。いうまでもなく、エチルアルコールは、精神安定剤代わりの作用をもっており、不安・焦燥・不眠の除去に役立つ場合も多い。しかし、酩酊によって中枢のコントロールが甘くなり、潜在的な自己破壊的願望が表面化し、衝動的な自殺が生ずることがある。このような場合、自殺企図者の中には、覚醒および

自らの行為に驚く者もいる。酔いは必ずしも、憂さを晴らすとは限らないことも、忘れるべきではない。

（浜松医科大学 教授 精神神経医学）